

伊豆の旅 2020



2020年9月

旅のチカラ研究所 植木圭二

残暑も続く8月の末、友人と二人で中伊豆のワイナリーに併設されたホテルに泊まって3日間で伊豆半島を巡ってきた。行き尽くしたと思っていた伊豆半島だが、まだまだ新しい発見があった。

■旅のきっかけ

今回の旅行はピースボートの地球一周の船旅で知り合った旅友からの誘いによるもので、その旅友とは私よりも20才以上も年上の“人生の大先輩”の鳩原（にゅうはら）さんだ。最近はこちらこちよこ旅のお供をさせてもらっている。

誘われた時に決まっていたのは伊豆にしては珍しいワイナリーに併設されたちょっとお洒落な名前の「ホテルワイナリーヒル」に泊まることだけで、昼の観光については何も決めていないという気ままな旅だった。

このホテルを予約した理由を鳩原さんに訊ねると、1泊2食付きで7500円という価格で泊まれる旅行会社の特別プランがあったためだという。それに加えてGo Toトラベルキャンペーンも利用すれば2連泊しても一万円ほどで泊まることのできるのではと予約したという。

私にしては今さら伊豆とう気持ちはなくはなかったが、価格もさることながら新型コロナウイルス感染症での閉塞感、さらに夏の猛暑からの脱出もあって快諾した。

そんな格安の旅に便乗して、友人の安否確認を思いついた。その友人とは地球一周の船旅で知り合った下田に住む75才の男性で、彼とは最近3カ月くらい連絡が取れずにいる。もちろん彼は私だけではなく鳩原さんとも共通の友人で、2人から出したメールには返事も返ってこない。携帯電話にも出ない状態なので2人ともとても心配していた。

そこで中伊豆まで行くなれば、もう少し足を延ばして下田まで行って、彼の安否確認をしたいという目的も加わった。

■中伊豆でワイナリーとは

今回は現地での待ち合わせなので、私はひとりで車を運転して中伊豆の小高い丘に向かっている。見えてきたのは、ぶどう園を中心に広がる複合施設「中伊豆ワイナリーヒルズ」で私たちが泊まるのはその中のホテルワイナリーヒルになっている。

鳩原さんとはホテルのロビーで再会した。既に彼がチェックイン手続きをしてくれていた。大先輩にそんなことさせて申し訳ないと思いながらも、私は「これもボケ防止のため」などと言って悪態をついている。

手回しの良い彼はワイナリーの無料見学会を申し込んでくれており、もちろん試飲コーナーもあるとのことで早速施設内循環バスに乗ってワイナリーに向かった。この複合施設は相当広い敷地なのでぶどう園を挟んで反対側にあるワイナリーまではバスで10分くらいかかる。

ワイナリーの入口付近に「シダックス」の名前が刻まれた看板があり、この施設はシダックスが作ったことを初めて知る。

案内のスタッフの話では、シダックスはフードサービスを中心に幅広く事業を展開する企業グループで創業者の志田勤さんがこの施設を造った。そして志田さんは御年86才だと聞き、何と鳩原さんと同じ年だと判明する。

志田さんは伊豆の韮山の出身で、故郷に錦を飾るためにここにワイナリーを核にした一大リゾート施設を開設したかったという。伊豆でワインなんかできないという周囲の反対を押しつけて開設したワイナリーは規模こそ小さいがブドウの栽培から醸造、貯蔵、ビン詰め、販売まで一貫して事業をしているから十分に錦を飾ったと言えるだろう。

その創業者志田さんのワインコレクションがワイナリーの地下にある。オーパスワンという一種類のカルフォルニアワインを年代別やグレード別に数多く集めたもので、何千本とある。そのようなコレクションは私の知る限り珍しい。

そうかと思うと一本100万円以上するロマネコンティが何本もある。案内のスタッフは「私は鍵の在処を知っているので、会社が傾いたらこれを持って逃げますよ」などと冗談を言っている。

工場見学の後にはたっぷりとワインを試飲させてもらい、ぶどう園を眼下にワイナリーからの眺めを楽しんだ。もちろん気分も景色も最高だ。こんな伊豆半島の山の中にこの施設を造った志田さんの思いは十分に私たちに伝わってきた。



<ワイナリー>



<ワインコレクション>

興奮とワインによる酔いが醒めないままにホテルに戻ってくる。

戻ってくる途中で驚いたのはこの施設の規模と多様性で、野球場、サッカー場、室内練習場、テニスコート、結婚式場、乗馬施設と何でそろっている。おそらくシダックスの野球チームの合宿にも使ったりするのだろう。

ホテルはアスリートや若者といったスポーツ施設利用者が宿泊するので大浴場は広く食事も食べ放題、さらに赤白のワインが飲み放題だからありがたい。いつもはウイスキーを飲む鳩原さんも今回はさすがにワインに徹して飲んでいる。私も大先輩に付き合い一緒にグラスを傾ける。

■下田を目指す

一夜明けて、本日は下田に向けて車を走らせる。さすがに昨夜は夕食でワインをたくさん飲み過ぎて、私の方が先に眠ってしまった。それにしても本当に恐るべき 86 才だ。

中伊豆から下田までの途中、「浄蓮の滝」がある。残暑厳しいおり涼むには好都合で、久しぶりに浄蓮の滝もいいだらうと立ち寄ることにした。

滝は木々に囲まれた溪谷にあり、滝のしぶきのお陰もあって涼しく快適だ。滝は高さ 25m とやや小ぶりだが、滝の横には六角形の柱状節理が見える。柱状節理は火山の噴火で流れ出した玄武岩の溶岩流が冷却して固まるとできると聞いたことがあり、まさしくその教科書のような光景が目の前に広がっている。



<浄蓮の滝 柱状節理>



滝壺の近くにはワサビ田が広がり、そのワサビも販売している。ここは静岡県、それも水のきれいな地域なのでワサビは名物になっており、このワサビを買っていく観光客も多くいる。

<浄蓮の滝の横にあるワサビ田>

国道 414 号線から少し外れ、旧道の天城トンネルにやって来た。案内看板に書かれていることはこのトンネルは 1905 年に完成し、そのおかげで伊豆半島南部への交通がいきりに開けたとある。それまでは急峻な峠越えか、海岸沿いに行くしかなかった。もちろん海岸には今のように立派な道路がある訳でもなく断崖ばかりで簡単に行けなかったのだろう。



<旧天城トンネル>

さてそのトンネルは以前来たときは通過できたが、今は補修工事中ということで記念撮影だけして戻るようになった。今では使われていない道にあるトンネルなので、普通に考えれば閉鎖、廃止するのだろうが、この解せないトンネルの補修工事は伊豆半島がユネスコの世界ジオパークに指定されたからで、補修の義務が生じたからだろう。

■河津七滝（ななだる）

天城峠までは道路に沿って流れる川の上流に向かって車を走らせていたが、峠を過ぎてからは川の向きが逆になった。明らかに天城峠あたりが分水嶺になっている。

天城越えをしてしばらく行くとループ橋を渡ることになる。いままで走ってきた標高がいきりに下がるので、道路はそれに対応するために直径 80m の二重のループを描いて高低差 45m を降りようになっている。普通の国道の橋なのにその景観が見事なのでループ橋そのものが名所になっているのは実に珍しい。



<国道 414 号線のループ橋>

その高低差は道路だけではなく国道に沿って流れる川も同様に、高低差を吸収するべく滝になっている。それが有名な「河津七滝（ななだる）」である。

河津七滝は鳩原さんが初体験ということで、7 つの滝全てを一気に見ることにした。私にしてもこの七滝を同日に全て見るのは初めてだ。それは 1 番目と 2 番目の滝が少し離れているために時間がないとどうしても 3 番目以降しか見ないで済ませてしまうからである。

1 番目の大滝は高さ 30m ということで浄蓮の滝よりも高い。滝壺に向かうために歩いていると浮き輪をもった家族連れとすれ違った。こんなところで「浮き輪？」と思ったが、それは滝壺付近に温水プールがあるからで、プール以外にもいくつもの露天風呂もある。従って温泉に浸かりながら滝見ができる。それにしても滝に温泉までは分かるが、プールとはいささか不思議で何でもありという印象がする。

次に高い滝は7番目の釜滝で高さ22mある。その間の2番目から6番目の滝はどれも小さくて2m程の滝も多く、無理に七滝にした感がある。4番目の初景滝の前には伊豆の踊子の銅像があり多くの観光客が写真を撮っている。



<5番目の蛇滝を上から見た柱状節理>

全て散策するのに要した時間は約1時間30分。遊歩道は良く整備されておりマイナスイオンを浴びながら山の緑を溪流沿いに歩くのは夏の暑い時季には清々しく、結構お勧めかもしれない。

そしてこの七滝でも至る所で立派な柱状節理を見ることができる。天城山付近の噴火で玄武岩の溶岩が南北に流れでて北側では浄蓮の滝、南側では河津七滝ができた訳である。

■生ワサビの昼食

2番目の滝の出合滝の近くに「出合茶屋」という茶屋がある。適度な運動をした後なのでそろそろ昼食でもと思って暖簾をくぐると、この河津七滝を訪れた有名人のサインが入った色紙が多く飾ってある。テレビや雑誌の撮影目的で訪れた芸能人たちがこの茶屋で休んでいくというパターンが多いのだろう。

メニューを見ると蕎麦やうどんの他にワサビ丼が目にとまる。ワサビ丼はこの辺りの名物だが、さすがに具がワサビという丼ぶりでは味が想像できてしまって、さすがにこれは遠慮して私たちは生ワサビ付きの盛り蕎麦を頼んだ。

そして出てきた盛り蕎麦には海苔がのっている。海苔がのっていれば、ざる蕎麦というのが一般的だが、まあいいか。

店の人から「ワサビを擦って、蕎麦の上にかけて食べてみてください」と食べ方を教えてもらう。私は早速ワサビを擦り下ろすと、若い緑色のペースト状のワサビからは実にいい香りがしてくる。これを言われたように麺つゆに溶かずに蕎麦の麺の上に直接乗せて食べてみた。私にしては初めての経験だが、これがなかなか美味い。ワサビ特有のあの鼻にツーンとくる感じが抑えられており、ワサビが効き過ぎずに実にいい風味を感じさせてくれる。市販のチューブ入りのワサビは鼻にツーンとくることだけに特化しているが、こちらの本物はそれだけではない。ツーンとはするのだが、まるやかで、みずみずしい味わいがある。さすがに本物は本物だけのことがあると二人で感心して瞬く間に食べ終わってしまった。

これならば案外ワサビ丼もいけるのかもしれないと思い始める。次回訪問することがあれば是非ワサビ丼に挑戦したい。



<生ワサビを擦り下ろした盛り蕎麦>

■友人の安否は如何に

さて、いよいよ友人の住む下田に入ってきた。車の中ではその友人と私たちが連絡つかない理由を二人でいろいろと議論して想像していた。

「きっと病院に入院しており、メールにも携帯電話にも出られないのだろう」

「いやパソコンのメールはともかくも、携帯電話は入院しても病院に持って行くのが普通なので出られるはずだ」

「携帯電話の電池が切れたのではないか」

「電池が切れていることはないだろう、呼び出し音が続くので切れてはいないはずだ」

「携帯電話は充電器につないだままになっているのではないか？」などと二人の会話は続いているが正解は分からない。

下田の彼の家の前には緑の芝生があって、彼は毎日芝生に水をまいて手入れをしていたことを思い出した。鳩原さんが「芝生がボウボウになっていたら家にいないということだ。そうなったら隣近所の家で聞き込みをするしかないな」などと言っている。

そして彼の家の前に到着した。何と芝生は青く、窓も開いている。車も玄関先に置いてある。

これは一体どうしたことだろう。

私と鳩原さんは顔を見合わせて、恐る恐る玄関の呼び鈴を押してみた。すると彼の声が聞こえてしばらくすると玄関に出てきた。

私たちを見て彼は驚いているが、それ以上に私たちが驚いた。

少し痩せた感じだが元気にしており、足もちゃんとあるから幽霊ではないらしい。

彼は「鳩さん、植さん、じゃないか！」と言って、「どうしてここに来たの？」と不思議がっている。私は「連絡がつかないから心配になって安否確認に来たよ」と事情を簡単に説明し始めた。

彼は「元気にしているから、そんな心配は無用だよ」、そして「コーヒーでも入れるから上がってくれ」と付け加えた。あまりにあっけらかんとした彼の様子に私たちは顔を見合わせた。

部屋に通され、コーヒーを飲みながらメールの返信や電話に出ない理由を聞くと予想もしない答えが返ってきた。

「面倒くさくなってさ」だと。

さらにいろいろ聞くが、ただ外界との付き合いが面倒くさくなったということらしい。確かに私と鳩原さんの用事と言えば旅行に誘う事ばかりなので、断るのさえ面倒になったという。

その理由に私も鳩原さんも納得できた訳ではないが、それ以上の答えを求める気持ちにはならなかった。

世間話を交えて1時間程話した後に、彼の家を後にした。

そして車内での私と鳩原さんの会話は「元気だったのは良かったけれど、放っておいて欲しいならば、何故そのことをちゃんとと言わないのだろうか」などと全く腑に落ちていない。

簡単に言えば“居留守”を使って私たちを避けていた訳だが、本人には全く悪気がなかったようで、86才の鳩原さんがしみじみと「世の中には理解できない人がいるのだね」と言っていた。

せっかく下田まで来たのだから帰りは西伊豆を回って戻ることにして、綺麗な西伊豆の海岸をドライブした。しかし何やら気が抜けて呆気にとられたままでせっかくの景色を楽しむ気分にはならなかった。

■三島スカイウォーク

最終日は伊豆半島の付け根、三島を巡ることにした。

まず行ったのは「三島スカイウォーク」、日本一長いつり橋をうたっている観光施設だ。

私はこの横の道をゴルフ場への往復でしばしば通過するが、入ったことがなかった。理由は簡単でつり橋を渡るだけなのに入場料が1100円も取られるからである。単に橋を渡るだけで観光客が来るのか、それも1100円も払ってという疑問があった。

この施設は民間の会社が観光目的のためだけに作った人間専用のつり橋で、日本最長の400mを売りにしている。大分県の九重高原にある夢大吊橋が390mなのであまり変わらないが、とにかく日本一を名乗ることに大きな意義があるので10m長くしたのである。

私はかつてその夢大吊橋ができて間もない頃に渡って390mを体験しており、400mには正直あまり興味がなかった。しかし今回の旅は伊豆の再発見という意味合いもあり、旅のチカラ研究所としては“日本一”を食べず嫌いではいけないだろうと、意を決し入場することにした。

実際に渡ってみると、やはり頭で考えて渡らない理由を並べているのとは大違いだと感じ始める。

もちろん橋から望む景色は良い。富士山、伊豆半島の山々、駿河湾、三島の街などを一望することができる。景色は想定範囲だが、想定外だったのは面白いアクティビティがそろっていることだ。

私たちがつり橋を渡っていると、つり橋と並行して長いワイヤーロープが渡されており、そのワイヤーロープを滑車で滑り降りるロング・ジップ・スライドというスリル満点の遊びをやっている。傍から見ていても面白そうなのでやっている本人は相当面白いだろう。



<橋の上から見たロング・ジップ・スライド>



<左の写真の赤枠部分の拡大>

橋を渡った対岸には森があり、その森の中には本格的なアスレチック施設がある。落下防止のために命綱を付けてアスレチックを楽しむようになっており、そのために施設はかなり高く組んである。もちろん高さだけではなく相当に広い。この2つのアクティビティは子供というよりも大人、それも若者に人気がありそうだ。どちらもインストラクターがついて講習しアシストしてくれる。今日は平日なのに順番を待っている人もいるから、これには驚いた。

パンフレットを見るとチームビルディングというのがある。チームを組んで難関が待ち受ける森の中をゴールに向かって進んでいくという一種のサバイバルゲームで、仲間で困難を乗り越えやり遂げることで充実感や達成感を味わえてコミュニケーション力や信頼関係などの向上が見込めるので企業研修にお勧めだと書かれている。

その他にセグウェイやバギーもある。セグウェイはあまり体験できる機会がないから富士山を見ながらの乗車体験も面白そうだ。子供向けのふれあい動物園や恐竜アドベンチャーなるものもあるから、小さな子供連れにも好評だろう。

正直言って私はこんなにすごい体験型施設になっているとは夢にも思わなかった。最近の旅行業界のトレンドは「観光から体験へ」と言われているが、それを如実に感じるようになった。

■三島の街

三島の駅前に「楽寿園」という公園がある。鴫原さんの話では、三島付近は富士山の湧き水が出るところで、楽寿園にある池はその湧き水によってできたもので湧き水の水量によって日々池の水位が変わるといふ。

楽寿園の入口には本日の水位 157cm と書かれている。その張り紙を確認しながら私たちは立派で由緒ある門から入園する。

園内は樹々で覆われた大きな森になっており、静かで涼しい別世界が広がっている。広場には蒸気機関車、メリーゴーランドもあり、駅前の一等地にこんな施設があることに驚いてしまう。

木々の間を歩いていくと、いよいよ湧き水を蓄えた小浜池に出る。この池の水は公園の外に繋がる水路から勢いよく流れ出ており、湧出量の豊富さが分かる。綺麗に澄み切った池の水は冷たそうで、気温 35℃の残暑の中にあっては実に清々しい。

池の畔に楽寿館という旧小松宮別邸の風情ある古い建物が、池を眺める絶好の位置に建っている。その光景は池と建物とが一体化した芸術作品として仕上がっている。



<小浜池と楽寿館>

池の畔の小径を散歩する市民や写真を撮る観光客が楽寿園を楽しんでおり、三島市民はこんな贅沢を日々体験できるのかとうらやましさいっぱい楽寿園を後にした。

贅沢な体験をもう一つ、三島と言えば“うなぎ”が有名だ。今回の最後の昼食には是非三島のうなぎを食べたいということで2人の意見は一致していた。

どうしてうなぎの産地でもない三島がうなぎで有名なのかというと、これも富士山の湧き水のお陰で、綺麗な湧き水にうなぎを数日間泳がせることによって生臭さや泥臭さが消え、日本一美味しいと言われるうなぎが誕生するのだと言われている。

昼時はどこのうなぎ屋も満員でなかなか簡単に食べることができないが、幸いして店舗がビルの2階で入口が分かり難いうなぎ屋「うなぎの坂東」で席に座れた。三島のうなぎ屋を紹介している観光協会のパンフレットで最初に出てくる店である。

早速メニューを見ると、うなぎはさすがに4000円前後する。しかしここに来てケチっていてもしょうがない。それに2泊したホテルの夕食でワイン飲み放題だったので、今回の旅行は酒代がかかっていない。懐が温かい私たちは躊躇なく“上うなぎ”を注文した。

しばらく待つことになるが、今回の旅の振り返りや次回の旅への思いを話していたら瞬間に時間は過ぎた。そしてうなぎとの対面になる。

食感は柔らかい。そして味はもちろん美味しい。富士山の湧き水を泳いだのか、澄みきった味がする気分になるから不思議だ。こういった名物料理を食べるときは、それが何故有名になったのかを知っているだけで一味違うということだろう。そしてやはり富士山の恵みは計り知れない。

私は旅の感動を得るために過去に行った場所にはなるべく行かないようにしている。その意味ではいつも来ている伊豆では、感動や発見などないかと思っていたが、まだまだ知らない場所や体験があることを思い知った旅になった。

■温泉評価委員会

私は温泉宿を評価する温泉評価委員会、通称「おひょい」を立ち上げている。それは温泉宿に泊まった時に組織される勝手気ままな委員会で、委員は同行した人になる。何が良かったとか悪かったとか、あれこれ話し合いながらも最終的に温泉や宿を評価して5段階で数値化する。

評価の基準は、5は驚きや感動、4は普通に良い、3は可もなく不可もない、2は普通に悪い、1は失望や落胆としている。

ホテルワイナリーヒルは温泉の泉質3、風呂4、料理4、コスパ5、サービス3、建物・部屋4、立地環境4、総合点（平均値）は3.86になった。

コスパは宿の評価なのでGo To トラベルキャンペーンの割引は無いものとしたが、2食付き7500円はこの内容ならば相当に評価できる。料理の4はワインの見放題が効いている。

総合点は一般的には5段階の75%にあたる3.75超えがまずまずという目安のラインで、4を超えるとかなり良い。

泉質はナトリウム・カルシウム一硫酸塩温泉で低張性アルカリ泉になっている。

■旅の記録

実施は2020年8月24日（月）～26日（水）の3日間、その行程を以下に示す。

- ・1日目 12時自宅を出発し中伊豆ワイナリーヒルズへ、15時現地到着
中伊豆ワイナリーシャトーT.S見学
- ・2日目 9時ホテル出発、浄蓮の滝、天城トンネル、河津七滝を見物後に昼食
下田の友人宅訪問、下田から西伊豆海岸ドライブ、17時ホテル到着
- ・3日目 9時ホテル出発、三島スカイウォーク、楽寿園散策後に昼食、解散

費用はGo To トラベルキャンペーンを適用させて約2万2千円、内訳は以下に示す。

- ・宿泊費 ホテルワイナリーヒル 15300円（現地支払い、1人分）
（1泊2食料金7500円×2+入湯税150円×2）
ただしGo To トラベルキャンペーンで5250円還付され、実質10050円
- ・昼食代 出合茶屋 盛り蕎麦 980円
うなぎの坂東 うなぎ重 4290円
- ・交通費 約4500円（小田原厚木道路往路1440円、ガソリン代約3000円）
- ・入場料 三島スカイウォーク 1100円
楽寿園 300円